愛知工業大学研究報告
第34号A　平成11年

ウェールズ再発見

（その１）

シェイクスピアとトマス・グレイの見たウェールズとウェールズ人

Wales Rediscovered

- Part 1 -

Wales and its People Depicted by Shakespeare and Thomas Gray

吉賀　憲夫
YOSHIGA, Norio

Thomas Gray wrote "The Bard" and slightly showed his favour to Wales and its people in the poem just as Shakespeare did so in *King Henry IV part I* and *King Henry V*. The poem is now thought to be one of the earliest masterpieces indicating the coming age of romanticism, though Samuel Johnson criticised the poem relentlessly. "The Bard" played an important role not only in the history of English literature but also in the process of true understanding of Wales and its culture by the English. Gray's translation of ancient Welsh poetry also made another contribution to the English evaluation of Welsh literature and history.

1

イングランドにおけるバラ戦争の結末がもたらしたウェールズ王家の血をひくヘンリー・テューダー(Henry Tudor)によるテューダー朝の樹立は、ウェールズをその貶められた地位から救い、自国の中で二流の国民として扱われていたウェールズ人の間に、ウェールズ人としての自負の念を取り戻させた。エリザベス１世の時代においては、彼らの自負の念はウェールズ人のアイデンティティを求める一連の活動となって表れた。それは人間としてもっとも根本的な自己確認のあり方、すなわち彼らの置かれている時空への関心、言い換えればウェールズ人の歴史とウェールズ人の生活する土地への関心の高まりであった。

ウェールズの歴史に関する著作が書かれた。1584年に英語で出版されたデイビッド・パウエル・オブ・リアボン(David Powel of Ruabon)の『カンブリア史』(*Historie of Cambria*)は19世紀後半までウェールズ史の定本となった。また多くのウェールズ郷土史も書かれた。ウェールズ地図が作成された。中でも特筆すべきものは1572年、デンビーシャーの医師ハンフリー・ルイド(Humphrey Llwyd)の作成したウェールズ地図が、オランダの地誌学者オルテリアス(Abraham Ortelius)の世界地誌『テアトルム』(*Theatrum orbis terrarum*)に付録として初めて掲載されたことであった。この地誌書は1573年から1741年

までに約50回増刷された。しかしこの地図はかなり不正確なものであり、より正確なものはスピード(Speed)により1611年に、またブラエイ(Blaeu)により1645年に出版された。ウェールズの地域地図の製作も盛んで、ウェールズ全州の地図がウイリアム・カムデン(William Camden) の２つ折り増補版となった英国地誌『ブリタンニア』(*Britannia*)の第６版で利用できるようになった。

しかしながら、これらの活動は主としてウェールズ人の自らの存在の自己確認であり、また同様にウェールズのより良き理解と認知を求める悲痛な叫びではあったが、広く一般のイングランド人の知的興味を呼び覚ますほどのものではなかった。現実にはウェールズやウェールズ人に対する偏見はイングランド人の間に強く残っていた。

イングランド人がウェールズ人に抱いた偏見の典型的なものは伝承童謡や当時の演劇に見ることができる。伝承童謡における極めつけは"Taffy was a Welshman, Taffy was a thief"で始まるこの歌であろう。

Taffy was a Welshman, Taffy was a thief,
Taffy came to my house and stole a piece of beef;
I went to Taffy's house, Taffy wasn't in,
I jumped upon his Sunday hat, and poked it with a pin.[1)]

この童謡は三連からなり、Taffyは第二連で「いかさま師」 "sham "、そして第三連では「詐欺師」"cheat"と呼ばれる。この歌はウェールズの守護聖人聖デイビッドを祝う3月1日のセント・デイビッズ・デイにウェールズ国境地帯や、その他のイングランド地域で歌われたという。[2)] このようなウェールズ人に対する一般的認識は決して子供や一般大衆の間だけの固定観念や偏見であったわけではなく、ジエイムズ１世の議会の議員が議会で同様のことを発言しているように[3)]、このような偏見が大変強く支配階層にまで浸透していたことがわかる。

ウェールズ人に関する恐らくもっとも強い偏見は彼らの言語、習慣に関するものであろう。イングランド人にはまったく理解できないウェールズ語を話し、英語もろくに話せないウェールズ人に対する軽蔑は強かった。例を挙げれば、ウェールズ人が話すウェールズ語訛りの英語に関して、シェイクスピアは『ヘンリー５世』で有能なウェールズ人大尉フルーエリン(Fluellen)の話す英語のｂ音をｐ音に変えることで滑稽に表わしている。例えばBlack PrinceはPlack Prince、brave battleは prave pattleという風にである。[4)] また『ウィンザーの陽気な女房たち』におけるウェールズ人牧師 サー・ヒュー・エヴァンズ(Sir Hugh Evans)の話す次の英語も面白い。

Fery goot. I will make a prief of it in my note-book, and we will aferwards ork upon the cause with as great discreetly as we can.
(*The Merry Wives of Windsor*, I, i, 144-6)

『ウィンザーの陽気な女房たち』はエリザベス女王の願いで、死んだフォルスタッフを再び生き帰らせ芝居にしたと俗に言われているものだが、しかしそこでのフォルスタッフは精彩がない。だがそのフォルスタッフをして「英語を粉微塵にしてしまう輩」と言わしめたエヴァンズ師は"cheese"を"seese"と言い、"butter"と"putter"と言ってはばからなかった。諦めとも嘆きともとれるフォルスタッフの " 'Seese' and 'putter'! Have I live'd to stand at the taunt of one that makes fritters of English?"(V,v,142-3)という言葉は、テューダー王朝のロンドンで幅を利かせ始めたウェールズ人に対する揶揄も含まれていたのかもしれない。確かにこのような台詞を聴き、ロンドンの観客はウェールズ人を大いに嗤ったのであろう。

OEDによると"Welsh"という単語が"A strange language; speech that one does not understand."の意味で使用され始めるのは17世紀中葉になってかではあるが、この単語はシェイクスピア劇でも興味深く使われている。『ヘンリー4世・第1部』3幕1場のバンゴール城内でのウェールズ側に与したイングランド人貴族ホットスパー(Hotspur)と、反乱の首謀者であるウェールズ人オーエン・グレンダワー(Owen Glendower)、正しくはオワイン・グリン・デュール(Owain Glyn Dwr)の会話はその良い例である。グレンダワーが自分の能力の非凡さを語り、自分に勝る者がいようかと豪語したとき、ホットスパーはその言葉尻をとらえ、"I think there's no man speaks better Welsh."(*1 Henry IV*, III, i,49)と言い、この"better Welsh"という言葉で、グレンダワーの神憑的で、独善的で、自信過剰な自慢話を一笑に付そうとしたのであった。またその後もホットスパーは「ウェール

語」という言葉を持ち出し、"Let me not understand you then, / Speak it in Welsh."(*1 Henry IV*, III, i, 118)とグレンダワーを揶揄する。ウェールズ人やウェールズ語に対する嫌がらせともとれるこの言葉に対し、グレンダワーは彼が英語の能力が十二分にあり、英語で詩歌を作る能力もあると次の様に反論する。

I can speak English, lord, as well as you,
For I was train'd up in the English court,
Where being but young I framed to the harp
Many an English ditty lovely well,
And gave the tongue a helpful ornament,
A virtue that was never seen in you.
(*1 Henry IV*, III, i, 119-124)

史実によれば、ウェールズ王家の血を引くオワイン・グリン・ドゥールは、イングランド宮廷で頭角を現した。事実、英語も堪能であった。詩を作る腕はホットスパーより上だという自負は、言い換えれば文化、教養面では彼の方が勝っていると言っているのである。それゆえに武勇一点張りのホットスパーは

Marry,
And I am glad of it with all my heart.
I had rather be a kitten and cry mew
Than one of these same metre ballet mongers.
(*1 Henry IV*, III, i, 125-8)

と、答えざるを得ない。とはいえ、ここでのウェールズ語の分の悪さはいかんともしがたい。だがシェイクスピアはウェールズ語に対しても公平な態度を維持している。グリン・ドゥールはイングランド王位に正当な継承権を持つエドマンド・モーティマー(Edmund Mortimer)を捕らえ、彼の娘と結婚させたが、シェイクスピアはモーティマーに妻の話すウェールズ語の美しさを語らせる。モーティマーはまず彼の妻が英語を喋れないこと、また彼自身がウェールズ語が解らないことを嘆くが、

I understand thy kisses, and thou mine,
And that's a feeling disputation,
But I will never be a truant, love,
Till I have learn'd thy language, for thy tongue
Makes Welsh as sweet as ditties highly penn'd,
Sung by a fair queen in a summer's bow'r,
With ravishing division, to her lute.
(*1 Henry IV*, III, i, 202-8)

と、妻の確たる愛に裏打ちされた言葉の持つ美しさを語る。これはおそらくウェールズ語に対する、当時としては破格の扱いであろう。

ウェールズの奇異な風習に関してはシェークスピアの『ヘンリー５世』第４幕７場に３月１日のセント・デイビッズ・デイに帽子に韮を飾る慣習についてフルーエリンの語るくだりがある。

... the Welshmen did good service in a garden where leeks did grow, wearing leeks in their Monmouth caps, which, your Majesty know, to this hour is an honorable badge of the service; and I do believe your Majesty takes no scorn to wear the leek upon Saint Tavy's day.
(*Henry V*, IV, vii, 98-103)

Saint Tavy's day の"Tavy"とはDavidが訛ったものであり、これからウェールズ人を指すTaffyが生まれたという経緯を教えてくれるのだが、それはさておき、このフルーエリンの台詞にもあるように、韮畑での大戦果を記念してセント・デイビッズ・デイに帽子に名誉のしるしとして韮を付ける慣習が始まった。しかし実際にはこの韮はウェールズ人への侮蔑の象徴となる。『ヘンリー５世』４幕１場で悪党ピストルは王とも知らずヘンリー５世とこのような会話を交わす。

Pist. . . . What is thy name?
K. Hen. Harry le Roy.
Pist. Le Roy? a Cornish name. Art thou of Cornish crew?
K. Hen. No, I am a Welshman.
Pist. Know'st thou Fluellen?
K. Hen. Yes.
Pist. Tell him I'll knock his leek about his pate Upon Saint Davy's day.
(*Henry V*, IV, i, 48-55)

勿論ヘンリー５世はウェールズ人ではない。彼は

自分がウェールズのモンマス(Monmouth)で生まれたからウェールズ人と言っているだけである。セント・デイビッズ・デイに先祖の功績を記念し帽子に韮を付ける習慣の始まりは、イングランド人のウェールズ人いじめの始まりでもあった。18世紀初頭のロンドンでは3月1日、ぼろ布でウェールズ人をまねた人形を作り、薫製のニシンにまたがらせ、韮の付いた帽子をかぶらせ、虐めるのが因習となっていたという。[5] このピストルの言葉も、これらイングランド人の慣習の根底に歴史的に深く根ざしている偏見を垣間見させてくれる。しかしフルーエリンの同僚ガワー(Gower)は、ピストルが韮を侮辱し、フルーエリンがイングランド人のように英語を話すことができないことを馬鹿にする態度を次のように強く嗜める。

> Go, go, you(Pistol) are a counterfeit cowardly knave. Will you mock at an ancient tradition, [begun] upon an honorable respect, and worn as a memorable trophy of predeceas'd valor, and dare not avouch in your deeds any of your words? I have seen you gleeking and galling at this gentleman twice or thrice. You thought, because he could not speak English in the native garb, he could not therefore handle an English cudgel. You find it otherwise, and henceforth let a Welsh correction teach you a good English condition. Fare ye well.
>
> (*Henry V*, V, i, 69-79)

ここに、何かと虐げられ、軽蔑されるウェールズ人を弁護するシェイクスピアを見る思いがする。しかし一方ここではこん棒の術に長けた、武勇の誉れ高いウェールズ人像も同時に語られている。

ウェールズ人将校フルーエリンのモデルは1592年、英国野戦軍司令官となった。サー・ロジャー・ウィリアムズ(Sir Roger Williams)と言われているが、シェイクスピアはヘンリー5世にフルーエリンについて次の様に言わせている。

> Though it appear a little out of fashion,
> There is much care and valor in this Welshman.
>
> (*Henry V*, IV, i, 83-4)

確かにウェールズ人に関しては武勇の民ということではイングランド人の意見は一致していたようである。百年戦争初期のクレシーの戦いの大勝利はプリンス・オブ・ウェールズ・黒太子に率いられた4,000人～5,000人からなるのウェールズ人部隊の奮闘によるところが大であった。また歴史を遡ればケルト人はローマ人やギリシア人には獰猛野蛮な悪魔の戦士と映った。[6] カエサルと戦ったのはガリア地方やブリテン島のケルト人であった。彼らは武器や装備の面でローマ軍にはるかに劣ってはいたが、実によく戦ったのであった。[7] そのようなケルト民族の血がウェールズ人を武勇の民としたのであろう。詩人ジョン・ミルトン(John Milton)はウェールズ院長官に就任するブリッジウオーター伯(Earl of Bridgewater)に捧げた仮面劇『コーマス』(*Comus*)を1634年にラドロー城で初演したが、その劇ではブリッジウオーター伯がこれから治めようとするウェールズ人を"An old and haughty nation proud of arms"(33)と讃えた。しかし確かに武勇に関してはそうであるかもしれないが、やはりそれは真のウェールズおよびウェールズ人理解とは異なる、固定観念による因習的、断片的な理解であったことは言うまでもない。

2

18世紀も中頃になると、ウェールズを取り巻く環境は変わり始めた。産業革命が始まり、ウェールズは鉄と石炭で次の世紀を牽引する役割を果たす。これとは別にこの頃、文化芸術における新古典主義、哲学における理神論への反動ともいえるロマン主義の萌芽がイギリスに現れ始めた。その一連の流れの中で、遠い過去への情念と憧憬は、文学界に古代や中世へのあこがれと興味を引き起こした。またそこから生み出された出版物はイギリス文学に大変大きな衝撃と影響を与えた。ジェイムズ・マックファーソン(James Macpherson) は1760年に『スコットランドのハイランド地方で採取された古詩の断片』(*Fragments of Ancient Poetry collected in the Highlands of Scotland, and translated from the Gaelic or Erse language*)、1763年にはオシアン(Ossian)と呼ばれる詩人の作の翻訳として8巻から成る叙事詩『テモラ』(*Temora*)を出版した。ウェールズ人エヴァン・エヴァンズ(Evan Evans)は1764年に『ウェールズ古詩選集』(*Some Specimens of the Poetry of the Ancient*

Welsh Bards, translated into English) を、トマス・パーシー(Thomas Percy) は1765年に『古英詩集』(*Reliques of Ancient English Poetry*)をそれぞれ出版した。ゲーテに激賛されることになるマックファーソンの通称『オシアン』は偽作であることが後で判明するが、それはゲール語の古詩という触れ込みでケルト文学に光を投げかけたものであった。ここからケルトマニアと呼ばれる熱狂的なケルト文化愛好者が生まれることとなる。『ウェールズ古詩選集』は同じくケルト文化の一端を担うウェールズ古詩の紹介であった。パーシーの『古英詩集』とあわせこれらはブリテン島全域の古代、中世の詩歌への強い関心を呼び起こした。

このような文学的状況の中、18世紀中葉、イギリス文学界の重鎮として存在した詩人に、ケンブリッジの隠者と呼ばれたトマス・グレイ(Thomas Gray)がいた。グレイは「田舎の墓地で読める哀歌」("Elegy Written in a Country Churchyard")で一躍有名となったが、寡作の詩人であり、学者であった。マックファーソンの発見したという古ゲール語の詩の真贋の判定に関してはグレイは即座にそれらが外的証拠から偽物であることを看破したが、内容的には正真正銘の本物であると評した。すなわち、その作品に現れたケルト的感性と詩的天才を彼は認めたのであった。また同様に彼はトマス・チャタトン(Thomas Chatterton)の偽作を見破った。このように文学鑑定に関しても彼は当代の目利きであった。

グレイが生前に出版した詩集には彼の最も有名な作品である「田舎の墓地で読める哀歌」を含めわずか13作が発表され、その他に若干の遺作が残った。しかし彼の作品群に特徴的なことは、ウェールズの吟唱詩人を扱った「吟唱詩人」("The Bard")の他、ウェールズ古詩と北欧神話の訳詩があることである。

Bardとはウェールズの吟唱詩人のことであるが、彼ら吟唱詩人は部族の家系や歴史、そして英雄の業績について吟唱し、また時には予言の任についたという。グレイの「吟唱詩人」という作品はエドワード１世のウェールズ征服をテーマにし、その後の英国史を下敷きとして、エドワードの子孫の不幸な運命と王朝の終焉を予言するという難解な詩で、ピンダリック・オードの形をとっている。

その詩は次のように始まる。エドワードの軍がスノードン山の険しいごつごつとした山腹を難行軍しているとき、コンウィ川を見下ろす岩の上に黒衣をまとい、白髪とあご髭を逆巻く風にたなびかせた一人の吟唱詩人が立ちはだかり、呪いの声を発する。

' Ruin seize thee, ruthless King!
Confusion on thy banners wait;
Tho' fann'd by Conquest's crimson wing
They mock the air with idle state.
Helm, nor hauberk's twisted mail,
Nor e'en thy virtues, Tyrant, shall avail
To save thy secret soul from nightly fears,
From Cambria's curse, from Cambria's tears!'
("The Bard", ll. 1-8)

このイングランドに征服されたウェールズ側からの視点は、イングランド人にとっては新奇であり、また「カンブリアの呪い、カンブリアの涙」という言葉に忘れられてしまった歴史の深奥を覗いた思いがしたであろう。

老詩人は滅び行く祖国の断末魔の叫びの只中で死んでいった伝説上のウェールズの英雄たち、すなわち高貴な生まれのホーエル(high-born Hoel)、心やさしいルエリン(soft Llewellyn)、嵐の海を鎮めたカドワロ(Cadwallo hush'd the stormy main)、勇敢なユリエン(brave Urien)を想う。しかし詩人は過去の英雄の死を嘆くことを止める。なぜなら詩人は彼らが安らかに眠ることなく、不気味な一団をなし、向こうの崖の上に座っているのを見るからであった。

On yonder cliffs, a griesly band,
I see them sit; They linger yet,
Avengers of their native land;
With me in dreadful harmony they join,
And weave with bloody hands the tissue of thy line.
("The Bard", ll. 44-9)

この「向こう側の崖の上に群がる一団」のイメージに、タキトゥスが『年代記』で、西暦61年、ブリタニア総督であったローマの将軍スエトニウス・パウリヌスがドルイドを攻撃し、ドルイド教徒の神聖な森を切り倒したというモナ（アングルシー）島攻めの記述を重ね合わすことができるかもしれない。

海岸に沿って敵が待ちかまえていた。武器と男でぎっしりとつまった戦列。その間を縫って走り廻っている女。さながら復讐の女神のごとく、喪服をまとい髪を乱し松明をふりかざしている。まわりでドゥルイデスたちが、両手を天にさしのべ、身の毛のよだつような呪詛を唱えている。この新奇な光景に、わが兵士はすっかり肝を潰し、五体がしびれたように一歩も動かず、敵の攻撃に身をさらしていた。[8)]

確かに、エドワードの軍勢の眼には、この老吟唱詩人は呪詛するドルイド神官に映ったかもしれない。しかし、タキトゥスの記述とは違い、グレイはこれら高貴な生まれのホーエル、心やさしいルエリン、嵐の海を鎮めたカドワロ、勇敢なユリエンを決して「髪を乱し松明をふりかざし」狂乱する復讐の女神のようには描いていない。彼らは確かに不気味ではあるが、故国存亡の折り、止むに止まれず、いわばウェールズの守護霊として、この老吟唱詩人の呪詛に力を貸し、エドワードの継承者らの遺体を包む呪いの遺骸布を織るという存在として描かれている。これらの英雄に付けられた「心優しい」、「勇敢な」という形容辞は、彼らに付けられるウェールズにおける伝統的な慣習であるが、グレイがそれらを踏襲している点に、既に一般のイングランド人とは異なる彼独自の共感に満ちた新しいウェールズ観が表れているといえよう。

しかしグレイと同時代の文学界のもう一人の立役者であるサミエル・ジョンソン(Samuel Johnson)は彼の『英国詩人伝』(*Lives of the English Poets*)の中でグレイの"The Bard"に言及し、これを徹底的に批判している。とりわけこれら過去の英雄らが、エドワードの子孫の呪いの遺骸布を織る件に関しては酷評を与えている。

The *weaving* of the *winding sheet* he borrowed, as he owns, from the northern Bards; but their texture, however, was very properly the works of female powers, as the art of spinning the thread of life in another mythology. Theft is always dangerous; . . . [9)]

「剽窃は常に危険である」と言うジョンソンの言葉はまことに厳しいものではあるが、しかし英雄らが呪詛の機を織るということに関しては確かに違和感があり、ジョンソンの言もおおいに頷ける。タキトゥスにおいては女でさえ、「さながら復讐の女神のごとく、喪服をまとい髪を乱し松明をふりかざしている」のであり、それに比べれば、これら英雄らの呪詛の方法は迫力に欠け、結果として英雄らは矮小化されていることは否めない。

ボズウェル(James Boswell)は彼の『ジョンソン伝』(*Life of Johnson*)でジョンソンのグレイ観を伝えている。

'Sir, I do not think Gray a first-rate poet. He has not a bold imagination, nor much command of words. The obscurity in which he has involved himself will not persuade us that he is sublime. His *Elegy in a Church-yard* has a happy selection of images, but I don't like what are called his great things.[10)]

ジョンソンはグレイの想像力を認めてはいない。だから彼が『英国詩人伝』で褒めたのはグレイのウェールズ詩や北欧詩の翻訳であったのも頷ける。ジョンソンもグレイも同時代に生きながら、あえて会うこともせず、文学においては別の道を歩んだ。ジョンソンのグレイに対する批評は厳しいものがあるが、それは両者の間の趣味の相違としか言いようがない。彼が『英国詩人伝』において "I do not see that *The Bard* promotes any truth, moral or political." [11)] と評すに至っては、両者の間に埋めがたいものがあると言わざるを得ない。しかしジョンソンのグレイ批判にもかかわらず。世の趨勢はグレイ的な方向へと着実に進んで行く。"No, Sir, when a man is tired of London, he is tired of life; for there is in London all that life can afford."[12)] と断言するロンドン中心の世界観に留まるジョンソンに対し、当時およびその後の文学的趣味と傾向はロンドンからより遠くの周辺部へと移行して行ったのであった。

さて、その年老いた吟唱詩人はこれから後の代々のプランタジネット朝のイングランド王の悲運と王朝の終焉を予言する。その予言が終わると過去の英雄らの姿は消えて行き、詩人は一人取り残される。しかしその彼らの姿が消えて行くと同時に、栄光の幻が現れる。それは"genuine kings, Britannia's issue" (110)であるウェールズ人の血を引くテューダー王朝の誕生の啓示であった。その中に老詩人はエリザベス女王を見るが、"Her eye proclaims her of the Briton-

line "(116)と、彼女がウェールズの血を引いていることを語る。ウェールズの吟唱詩人は過去の英雄たちがこの世に輝かしい帰還を果たすことを繰り返し唄ったが、このエリザベスにその予言の成就を予見させている。この神々しい女王の姿を幻に見て、彼は満足し、断崖から身を投げ、この詩は終わる。

グレイのこのオードは「詩歌の進歩」("The Progress of Poesy") と共に1757年にホレース・ウオルポール(Horace Walpole)により出版された。この詩は英詩にウェールズを主題とした新しい視点を持ち込み、英詩の領域を広げる嚆矢となった。この様な英詩以外の文学へのグレイの興味は、彼の『英詩史』(*History of English Poetry*)の執筆企画によく表れている。結局この著作は断念されたが、そこに盛り込まれていた新機軸はまさに斬新であった。それは詩が文化や歴史に深く根ざした存在であるという視点であった。それゆえに彼は英詩をとりまくケルト諸民族の詩歌に興味を示したのであった。[13] この様な視点がグレイにウェールズの詩歌に興味を持たせる一因となったのは確かである。この詩以降、1760年にマックファーソン、1764年にエヴァン・エヴァンズ、1765年にはトマス・パーシーの著作が現れるが、グレイの「吟唱詩人」はこれら一連の地域古文学発掘の震源となったのである。

「吟唱詩人」の出版された年の5月に、グレイはケンブリッジでウェールズの盲目の竪琴奏者ジョン・パーリー(John Parry)の演奏を聴いている。[14] ジョン・パーリーはサー・ワトキン・ウィリアムズ=ウィン(Sir Watkin Williams-Wynn)付きの当時の英国における最高の竪琴奏者の１人であり、1746年4月ロンドンで初めて演奏を行った。その後彼はケンブリッジ、オクスフォード、ダブリンを演奏旅行している。また彼は1742年に『古代ブリトン音楽』(*Ancient British Music*)、1761年に『ウェールズ、イングランド、スコットランド旋律集』(*A Collection of Welsh, English, and Scotch Airs*)、1781年に『ブリトン人の音楽：古代ウェールズ旋律集』(*British Harmony, being a collection of Ancient Welsh Airs*)を編纂、出版し、ウェールズ文化の紹介に大いに貢献した。当時の有名なウェールズ人の竪琴奏者の多くは竪琴教師としてロンドンに住んでおり、新しいロマンティシズムの誕生の下地を形成する一翼を担っていたのであった。

グレイのウェールズ古詩の翻訳は12世紀のアングルシーの宮廷詩人グワルクマイ・アプ・メイリル(Gwalchmai ap Meilyr)の「オーエン・グィネズへの頌歌」("Ode to Owen Gwynned")の翻訳で、「オーエンの勝利」("The Triumphs of Owen, a Fragment") としてグレイの1768年度版詩集に現れるが、そこには "From Mr Evans's Specimen of the Welch Poetry, London, 1764, Quarto"と出典が記されている。『ウェールズ古詩選集』はウェールズ人、エヴァン・エヴァンズが1764年出版したもので、原詩とその英語散文訳を掲げており、最後にラテン語でエヴァンズの書いた「ウェールズ詩人論」が付いていた。面白いことには、グレイは『ウェールズ古詩選集』が出る前に、その草稿を読む機会を得ていた。エヴァンズがウェールズ文化支援団体ともいうべきカムロドリオン(the Honourable Society of Cymmrodorion)を創設したリチャード・モリス(Richard Morris)に宛てた1760年４月23日付けの書簡には、法律家であり、博物学者であり、エヴァンズの友人で、グレイの友人でもあり、メリオネス、カーマーゼン、アングルシーの判事バーリントン(Daines Barrington)がこの草稿をグレイに見せるつもりであると言ったということが書かれている。確かにグレイは草稿の形でそれを読んだようである。グレイは1761年ごろその英散文訳を利用し「オーエンの勝利」を書いたものと考えられる。

その他数片のウェールズ翻訳詩が遺作となった。それらは「ホーエルの死」("The Death of Hoel")、「カラドック」("Caradoc")それに「コナン」("Conan")で、ともに北ブリトンの著名な詩人アナイリン(Aneurin)の叙事詩『ゴドジン』(*Gododdin*) からの抜粋である。この『ゴドジン』は６世紀末、北ブリトンにあったメナウ・ゴドジン王国の軍がアングロ・サクソン国のディラへ遠征し、その精鋭騎兵300がわずか３名を残しカテリックの地で全滅する、という物語である。グレイはエヴァンズの「詩人論」のラテン語訳から、これら３作を重訳したものと思われる。ちなみに北ブリトン人もウェールズ人も言語や文化という面で共通のものを有していた。またこのゴドジン国からキネザ(Cunedda)という族長に率いられ、北ウェールズのアイルランド人（スコット族）を駆逐しそこに定住した部族は、後のグイネズ王国の礎を築くことになる。

ウェールズ古詩の翻訳とともにグレイはまたノース語の詩にも興味を示し、彼の詩集に「運命の魔

女」（"The Fatal Sisters"）と「オーディン下向」（"The Descent of Odin. An Ode"）を翻訳しているが、彼の「吟唱詩人」やウェールズ詩の翻訳はイングランドの知的階層にウェールズの文化的な面での存在を知らしめたのであった。

（続く）

注

1. Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (Oxford University Press,1951 and 1989), p. 400.
2. *Ibid.*, p. 401.
3. A. H. Dodd, *A Short History of Wales : Welsh Life and Customs from prehistoric times to the present day* (London : B. T. Batsford Ltd., 1977), p. 87.
4. *Henry IV Part I* のフルーエリンの次の台詞：
   Your grandfather of famous memory, and please your Majesty, and your great-uncle Edward the Plack Prince of Wales, as I have read in the chronicles, fought a most prave pattle here in France.
   (*1H4*, IV, vii, 92-5.)
5. Iona and Peter, *Opie, op. cit.*, p. 401.
6. ゲルハルト・ヘルム(関楠生・訳)『ケルト人』(川出書房新社, 東京, 1976年), pp.15-17 と pp. 50-51.
7. カエサル (近山金次・訳),『ガリア戦記』(岩波書店, 東京, 1964年), p. 46および p. 141.
8. タキトゥス (国原吉之助・訳)『年代記（下）』(岩波書店, 東京, 1981年), p. 119.
9. Samuel Johnson, *Lives of the English Poets* (2 vols., World Classics, Oxford University Press, 1975), II, p. 463.
10. James Boswell, *Life of Johnson* (Oxford University Press, 1904 and 1969) , p. 285
11. Samuel Johnson, *op. cit.,* p. 462.
12. James Boswell, *op. cit.*, p. 859
13. Paget Toynbee and Leonard Whibley (ed.), *Correspon-dence of Thomas Gray* (3 vols., Oxford : 1935, 1971) , p. 1123.
14. *Ibid.*, pp. 501- 2.

参考文献

The Riverside Shakespeare (Boston: Houghton Mifflin Co., 1972)..

The Dictionary of Welsh Biography down to 1940 (The Honourable Society of Cymmrodorion, 1959).

Black, Jeremy. *A History of the British Isles* (London: Macmillan, 1996).

Bush, Douglas., ed. *Milton Poetical Works* (Oxford Standard Authors, Oxford University Press, 1966).

Cannon, John., ed. *The Oxford Companion to British History* (Oxford: Oxford Univrsity Press, 1997).

Davies, John. *A History of Wales* (London : Penguin Books, 1994).

Dodd, A. H. *A Short History of Wales : Welsh Life and Customs from prehistoric times to the present day* (London: B. T. Batsford Ltd., 1977).

Harvey, Sir Paul. *The Oxford companion to English Literature* 4th edn. revised by Dorothy Eagle (Oxford, 1967)

Poole, A. L., ed. *The Poems of Gray and Collins* 3rd Edition Revised (Oxford, 1937) .

Williams, Gwyn A. *When Was Wales?* (Penguin Books, 1985).

青山吉信,『アーサー伝説』(岩波書店, 東京, 1985年)

福原麟太郎,『トマス・グレイ研究抄』(研究社, 東京, 1965年）.

福原麟太郎,『墓畔の哀歌』(岩波書店 [岩波文庫] , 東京, 昭和43年).

（受理　平成11年３月20日）